

(2) 「無気力」型への支援モデル

「無気力」型については、「不安など情緒的混乱」の型に比べて、教職員がより積極的に、継続してかかわることがポイントになってきます。

そこで、このタイプでは、教職員と子どもの良好な関係づくりから始まり、学校へつなぎ戻すような支援が有効になります。

本人の心を理解する時期

- ・ 登校ができなかったら、「少しずつ登校できるようにしていこう」と告げた上で、「不安など情緒的混乱」の型よりは積極的に登校刺激を試みる。

〔この時期の家族への支援〕

- ・ 保護者の不安や焦りをよく聴き、心の安定を図るように努めてもらう。
- ・ 保護者を責めるのではなく、協力して解決していくことを伝えていく。

人間関係を深める時期

- ・ 本人の好きなこと、興味のあること、熱中していることや遊びについて、教職員自ら理解し、一緒にやってみる（スポーツ、ゲームなど）。
- ・ 学校の様子を伝える。
- ・ 勉強で分からないところは、「いつでも教えるよ」と伝える。

〔この時期の家族への支援〕

- ・ 本人の長所やよい行動、少しでもよくなった点を保護者に伝えていく。
- ・ 家族と食事をしたたり、外出したりするなど、ふれあう時間を増やすようにしてもらう。



本人に目標をもたせる時期

- ・ 本人が選択して決定できる場を用意し，自己決定の場を多くもたせる。
- ・ 本人がやりたいという勉強を教え，できたらほめていく（最初は短時間で終える）。
- ・ 登校しやすい時間帯を聞き，その時間帯での登校を勧めてみる（好きな教科がある時や行事がある時に誘うのもよい）。その際，「学級のみんなも会いたがっているよ」と伝える。
- ・ 学級に入ることがつらければ，保健室や相談室でよいことを伝える。

〔この時期の家族への支援〕

- ・ 保護者が一生懸命取り組んでいることにねぎらいの言葉をかける。
- ・ ある程度の厳しさをもって，生活習慣をきちんとさせるよう努めてもらう。
- ・ 登校の誘いをする場合は，事前に保護者と連絡をとり，登校する日には，強く押し出してもらう。

登校できるようになった時期

- ・ 保健室や相談室登校でも，その努力をほめる。
- ・ 「無理して，一日いなくてもいいよ」と伝える。
- ・ 欠席した時は，必ず家族や本人と連絡を取り合う。
- ・ 本人のよいところや努力したところを認め励ましながら，学習や学校生活への自信を取り戻させる。

〔この時期の家族への支援〕

- ・ 学校や家庭での子どもの様子を情報交換し，学校と家庭とが協力して支援を進める。
- ・ 保護者の努力にねぎらいの言葉をかける。



学校での指導と支援

- ・ 登校するように励ましたり，教職員や友だちが朝迎えに行ったりするなどの働きかけを続ける。
- ・ 学校生活におけるやりがいや自己表現の機会をもたせる。
- ・ 長期化するなど状態が改善しない場合は，関係機関と連携しながら支援していく。

(3)「あそび・非行」型への支援モデル

「あそび・非行」型については、「無気力」型への支援に加えて、次のような支援がポイントとなります。また、学校での指導の範囲を超えると判断された場合は、早期に関係機関（p. 47 参照）と連絡を取り合い、協力し合って指導を行うことが重要です。

本人の心を理解し、人間関係を深める時期

- ・ 問題行動の背景を理解するために、本人の話を十分に聴いて、本音で話せるような、よい人間関係を築く。
- ・ 本人のよいところ、できたところなどを適切にほめていく。
- ・ 考えや行動の誤りは、本人を理解した上で注意を与えたり、考えさせたりする。

〔この時期の家族への支援〕

- ・ 反抗的な態度の背景には、寂しさや満たされない思いがあることを伝え、子どもの言動に過剰に反応しないで、本人の気持ちを理解し、温かい対応に努めてもらう。
- ・ 本人のよいところ、できたところを保護者にも伝えほめるなどして、問題行動の改善に向けての保護者の意欲を高め、協力して支援を進めるようにする。

本人に目標をもたせる時期

- ・ 本人の夢や希望について話し合う。
- ・ 一緒に計画を立て、ほんのわずかでも勉強してみるよう勧める。
- ・ いけないことはいけないこととして指摘し、考えさせる。

〔この時期の家族への支援〕

- ・ 非行には、保護者も毅然とした態度で正すよう努めてもらう。



登校できるようになった時期

- ・ すべての教職員が温かい言葉がけをする。
- ・ 友だちとの関係づくりを進め、本人の学校における居場所づくりに努める。
- ・ やりがいのある仕事や活動ができる場を与え、達成感をもたせる。
- ・ 本人の得意な教科等から個別指導を行い、学習への自信や意欲をもたせる。

学校での指導と支援

- ・ さまざまな問題行動の改善には長期間かかる場合が多く、チーム（本人の話を聴く、関係機関と連携する、保護者と話をするなど）で対応する。
- ・ 本人を取り巻く関係者やグループへの対応が必要な場合は、警察や少年サポートセンターなどの関係機関と連携・協力した指導体制をつくり、対応する。
- ・ 家庭環境を調整する必要があると判断された場合は、地域の民生委員児童委員、主任児童委員、あるいは、児童相談所などの関係機関に相談する。